

前十字靭帯再建術時に施行した半月板縫合術後の治療成績

矢頭透¹⁾湯朝友基²⁾張敬範²⁾江本玄²⁾

1)江本ニーアンドスポーツクリニックリハビリテーション部

2)江本ニーアンドスポーツクリニック整形外科

【はじめに】

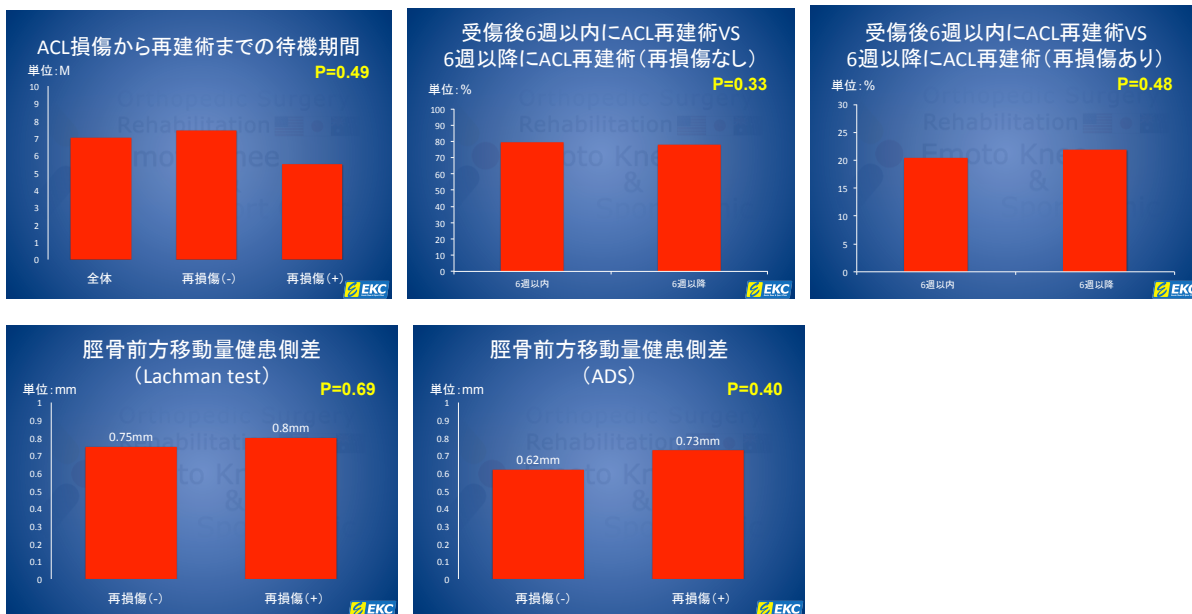
前十字靭帯（以下 ACL）不全膝に対する評価として、Lachman test や前方引き出しテスト（以下 ADS）などの徒手不安定テストや、KT-1000 などを用いた不安定性の測定は非荷重位で行うことが一般的である。当院では 2009 年 7 月から AIRCAST 社製 Rolimeter を使用し、膝安定性を評価している。ACL 再建術時に施行した半月板縫合術後の経過において、ACL 損傷から再建術までの期間が長い症例と脛骨前方移動量が増加した症例は半月板再損傷が高い傾向にあるという仮説を立て、調査を行った。

【方法】

対象は、2009 年 7 月から 2016 年 12 月までに初回 ACL 再建術時に半月板縫合術を施行した 324 例。抜釘術 268 例施行（男性 104 例、女性 164 例、平均年齢は 23.2 歳）。

【調査項目】ACL 損傷から再建術までの期間、抜釘術前の脛骨前方移動量（Lachman test、ADS）。統計学的処理は対応のない t 検定を用いた。

【結果】



* どの結果からも有意差は認めなかった

【考察】

Tengrotenhuysen ら

受傷後 6 週間以内に ACL 再建術時、半月板縫合術を施行した症例の治療する確率が高かった

(Knee Surg Sports Traumatol Arthrosc 2011)

先行研究と同様に受傷後 6 週間以内に ACL 再建術を施行した症例の方が半月再損傷は低い傾向

Rochcongar ら

再断裂の危険因子として、前後方向への緩みが 4mm 以上の症例で、治癒率が有意に低かった
(**Orthop Traumatol Surg Res 2015**)

4mm 以上の健患側差を認めた症例は 3 名存在し、1 名に半月再損傷認めた
中田ら

ACL 再建術による膝安定性が不良であれば、半月板縫合術後の成績は不良
(**Journal of Minimally Invasive Orthopaedic Surgery 66**)

膝安定性に有意差は認めなかったが、半月再損傷が認められたため、別の因子が関与していることが考えられる

【本研究の課題】

- ・ 検者が同一人物でない
- ・ 手術を複数名の Dr が施行している
- ・ 手術の術式が一定ではない
- ・ 半月損傷形態の相違

【まとめ】

- ・ ACL 再建術時に施行した半月縫合術後の治療成績に関する調査を行った
- ・ ACL 損傷から再建術までの期間において半月再損傷例に有意差は認めなかった
- ・ 脛骨前方移動量の健患側差において半月再損傷例に有意差は認めなかった

